

東シナ海域の越境汚染には共通理解が必要である

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 秋山, 秀樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2008577

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



水は巡る

— 東シナ海域の越境汚染には共通理解が必要である —

東シナ海海洋環境部長 秋山 秀樹

最近、東シナ海域の海洋環境の変遷に関連した3つのシンポジウムに出席しました。それぞれのシンポジウムのキーワードは「大型クラゲ」と「海洋環境変動」と「漂流ゴミ」です。これらはいずれも、今日本で大きな問題としてクローズアップされている「越境汚染」に関する話題です。

かつての日本は公害先進国で、大気や海洋に対して有害物質を大量に放出していました。国内では公害による被害が多く報道されていましたが、日本の東の北太平洋上の近隣には幸い陸地がないので、公害の影響は目立たず、他国に実害を及ぼすことは少なかったのです。

ところが、近年の東アジア諸国の経済発展に伴って汚染の状況は一変しました。これまで日本は影響を与える側であったのが、これからは影響を受ける側となってしまったのです。国境を越える汚染の例としては、大型クラゲ、赤潮、漂流ゴミ、大気汚染などが挙げられます。それぞれの越境汚染の実態は、テレビや新聞等の報道で、すでに広く知られています。

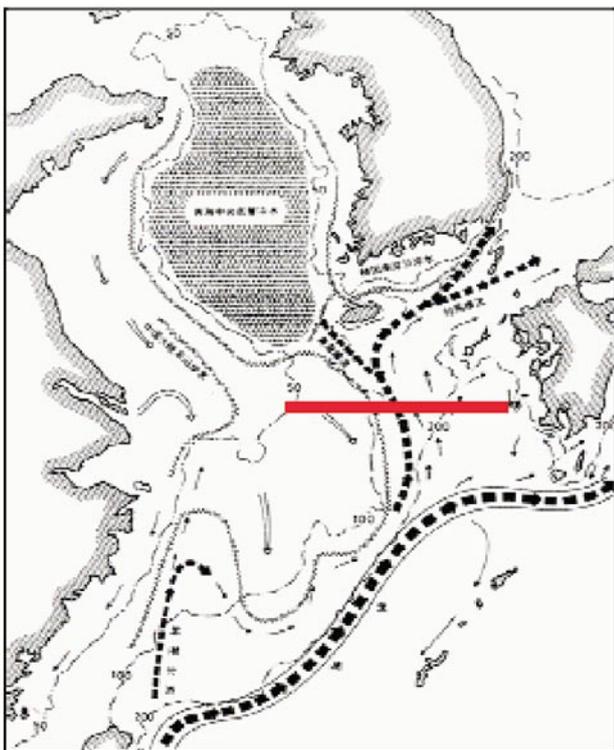


図1 黄海～東シナ海の海流と水塊配置の模式図

視点を東シナ海域に絞って考えてみると、前号（西海 No.4）の図1（再掲）で示した黒潮や対馬暖流、さらには季節風や偏西風に代表される風などが、上記の汚染物質の輸送に深く関与していることが、前述の3つのシンポジウムの成果で明らかにされました。また、大型クラゲの分布には中国大陸系沿岸水の勢力や黄海冷水の分布領域の広がりがある可能性も考えられます。黄海～東シナ海域における汚染物質の輸送の実態を突き止めるためには、広域にわたる現地調査が必要不可欠であること、また日中韓3国の連携が必要であることは自明です。

ところが、現在推定されている大型クラゲや漂流ゴミの輸送経路である黄海～東シナ海域では海洋環境の広域調査はほとんど実施されていません。なぜなら、そこには日中韓3国の境界が存在するからです。

そんな中でも、西海区水産研究所では、日韓両国政府の協力を得て、九州西方の対馬暖流源流域の浮魚類の仔稚魚分布の特性および海洋環境の変化を継続的にモニターするため、CKライン（長江と甌島を結ぶ方向、図1の赤い線）を設定し、年4回の漁場環境モニタリング調査を重点的に実施しています。

ところで、私が大型クラゲのシンポジウムに出席して得たことは、日本や韓国では大型クラゲは「有害生物」ですが、中国では「食料」であるということです。国が違えば、ある物に対する認識も異なることを身をもって知らされました。他のシンポジウムでも同様のことが議論されました。「越境汚染」問題を解決へ向けて進展させるためには、東アジア諸国で十分に話し合う機会を設けて、各国の国民が「越境汚染」に対する共通の理解を確立する必要があります。

3つのシンポジウムの今後の課題は自ずと一致していて、「共通理解に基づく連携」です。「東アジア諸国の連携」は美しい言葉ですが、文化や価値観の異なる複数の国家・国民が「共通の理解」を確立することは難しいことです。我々は鋭意努力するのみです。